

第9回「日本語大賞」

テーマ「ちょっと気になる日本語」

高校生の部 優秀賞 受賞作品

「言の葉を紡ぐ」

東京都
学習院女子高等科
2年 池田 佳穂

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ

日本最古の勅撰和歌集、古今和歌集のうちの有名な一首である。その古今和歌集の撰者の一人、紀貫之による和歌で、楚々とした可憐な情景が春という季節を中心として三十一字の中に込められている。ふと目を落としその字面に視線を滑らせるだけで、和歌に描かれた景色が流れるように脳内を占領し五感をくすぐる。手にすくった河川の冷たさ、結氷の儂い輝き、暖かな風の音とその心地良さ。何より、その季節の流れを、名詞の連なりから想像することができる。

形容詞をほとんど利用することなく、様々な「もの・こと」に対する感懐を表現することができる。これが日本語という言語にとつての美德であろうと私は考えている。だからこそ、たった数十字の中に意味を込めて言語を綴りそれを披露する、日本独自の「和歌」という詩の文化が発達したのだと言えよう。

しかしその言語というものは、常に文体、つまり表現方法が移り変わっていくものでもある。言語の遣い手である人というのは流動的なものであるから、この変遷は至極当然のことである。もちろん日本語も、言語として成立している以上、その例外ではない。例えば現代において「ツイート」と呼ばれる百四十字以内の短文の投稿を共有する情報媒体「ツイッター」が、日本では他国と比べて著しく発達しているのを、和歌の発達からの変遷だとすることもできるだろう。

またそのような変化の一端としては、カタカナ語の利用を挙げることでもできる。これは「インターネット」や「コンピュータ」といったように英語等の外国語をカタカナで表記して利用することを指すものだが、近年多くの日本人によって、日常的に様々な場で使用されているのが少し気にかかってしまう。カタカナ語を利用することの難点として、その意味が難解である、といった問題が存在するからだ。先に挙げたような簡単な英単語ならまだしも、例えば、「エビデンスが（証拠が）」「コミットメントを（約束を）」などと言われては、カタカナ語というよりは寧ろ英語そのもののように感じてしまう。日本語の単語一つとっても、様々な意味をはらんでいるように、外国語の単語一つ一つにも、同じように沢山の意味がある。やはり、意味のとりづらいカタカナ語は、日本語に訳して表現するべきなのではないだろうか。

日本語の歴史を辿ってみても、それを多用するべきではないという姿勢は妥当であるように思えてくる。例えば明治維新後には、文明化する社会の中で、様々な西洋の概念や文物が日本になだれ込んだ。その時に誕生したのが、外国語を日本語に訳した「和製漢語」というもので、「愛」や「自由」といった言葉は、その時に作られた和製漢語に当たるものだ。カナ語のように、そのままの読みを採用するのではなく、わざわざそのような手間をかけた。様々、訳はあるだろうが、それは海外の観念を日本の文化に組み込むという意図の下でも行われていたのではないだろうか。他国の文明を取り込むこと、それは時として「自国の文化を廃れさせるかもしれない」という危険を伴う。よって、その危険を少しでも回避しようと、和製漢語がつくり出されていったのではないか。

つまり、その考えから言えば、カタカナ語の頻用は日本語の概念を脅しかねないのである。カタカナ語は主に若年層に利用されることが多いそうだが、確かに、私もその若者としての立場に立ってみれば、カタカナ語を利用した方が意思が伝わりやすいこともある。だから何も、外国語を敵性語として排斥していた戦時中かのように、その使用を全面的に否定するわけではない。全面的な否定は暴悪なものであるし、寧ろ「インターネット」「コンピュータ」といった言葉は、日本語では表現しえないだろう。ここで言わんとするところというのは、そのようなカタカナ語の存在の否認ではなく、日本語で言い表すことのできる言葉を敢えて外国語で表現しようとする姿勢は果たして本当に最適なのだろうか、ということである。通信媒体の発達によって人々の交流の場が国内から世界へと移り変わりつつあるこの世の中で、外国でできた新しい概念を次々取り入れようとするその姿勢は理解出来る。しかしそのような時勢だからこそ、あまり受動的な態度になるのではなく、他文化との調和を重んじるべきなのではないだろうか。

万一、日本語の瓦解によって、その美しい旋律が乱れてしまったとしたら、それは憂愁に閉ざされる思いである。両手にすくい上げた無垢で優美な言葉たちを、冷たい氷塊のうちに閉ざしてしまうのか、それとも洗練された成文に紡ぐことができるのかどうかは、偏に、その作り手に左右されるものだ。